

## →水上勉の「一休を歩く」を歩く

2020.2.9 (日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第 554 回 参加報告

その死を押しとどめたのが何であったのかははっきりしていませんが、その後、湖西堅田の祥瑞寺で華叟宗曇和尚と出会い、禅の修行に励んだとのこと。京都五山の僧侶たちは華美に走り、そこに「宗純」が求めるものはなく、地方に隠れて暮らす真の高僧を自らの師とせんとし、その華叟和尚から「一休」の号を賜ったのだそうです。

さて、地蔵院の近くには苔寺で有名な西芳寺があり、ともに臨済宗とのこと。室町時代、禅宗はまだ新興宗教であり、三代将軍・足利義光時代になって隆昌したとのことでした。松尾大社への道すがら、北朝方が権勢をふるう京都で、南朝方の出自であった一休の母の肩身の狭い立場のことなども、フト思い合えました。

最後に訪ねた松尾大社は、お酒の神様かと思っていましたら、それは中世以降のことで、洛北の賀茂社と並んだ屈指の古社であり、本殿の後方松尾山の日崎(ひざき)の峰に巨岩のある岩座信仰から始まっているとのことでした。主祭神は大山咋命で上賀茂社の祭神賀茂別雷命の父神。松尾大社は奏氏と関りがあり、蚕の社(木嶋坐天照御魂神社)にある三柱鳥居と松尾山の立地の話を思い起こさせました。当日は、昨年秋の山崩れで、磐座には近寄れないということでしたが、庭園めぐりと神像館を当大社の方にご案内いただきました。

重森三玲(みれい)のお庭「曲水の庭」「上古の庭」「蓬萊の庭」は今までの作庭とは異次元の発想で面白く、洛南の東福寺にも三玲の庭があったことを思い出しました。今まで東山の無鄰庵の庭、野村別邸碧雲荘の庭、元住友邸清風荘の庭などを作庭した七代目小川治兵衛の庭が好きでしたが、現代感覚の重森三玲の庭もまた面白く興味深かったです。

神像館では、木造男神座像 2 軀と木造女神座像 1 軀が神像として最古の物との事、存在感を覚えました。最後に、大杉谷から湧き出る清泉は「霊亀の谷水」と言われており、平清盛も熱病の際に、この水を使った(??)話を前に聞いたような……。清盛の治療水には水薬師寺など、様々な説があるようですが、とにかく私たちもその霊泉をいただきました。

午前中、地蔵院で引いた禅語おみくじに、「喜色動乾坤」(きしょくけんこんをうごかす)という言葉が書かれていました。「人にやさしい笑顔を向けられるあなたのところには方々から幸せ



松尾大社 庭園拝観

が集まり、そしてさらに、あなたから幸せの輪がどんどん広がっていくでしょう」という意味だそうです。心して、明日を暮らしていこうと思います、その地蔵院の侘助椿は花も小さな古木でしたが、松尾大社の侘助は一重の花達がシャキットしているようで清楚に感じられ、今日一日とても充実した気持ちが得られました。ありがとうございました。

<報告：中村文子>



松尾大社